

## V 資 料

### 「読書へのアニメーション」の成立

足 立 幸 子

#### 1. 問題の所在

1997年に『読書で遊ぼうアニメーション—本が大好きになる25のゲーム—』<sup>(1)</sup>(以下、『25の作戦』)が出版されて以来、「読書へのアニメーション」は、新しい読書指導の方法として日本の国語教育界でも認知され、様々な実践が行われ始めている。しかし、スペインの「読書へのアニメーション」が本来どのような背景のもとに成立し、どのような特徴があり、したがって、日本導入にあたってどのような意義がありどのような影響を与え得るのかといった原理的研究はほとんど行われていない。原理的研究を行うにあたって、まずは、この方法の成立過程をたどることが重要である。なぜなら、あらゆる教育の方法はその歴史的事情の上に成り立つのであり、その成立過程を追えば、この方法がよって立っている理論が明らかになるからである。そこで、本稿では成立過程を明らかにすることを通して、「読書へのアニメーション」の特徴を導き出し、日本における意義や影響を論じることを目的とする。

ところが、この方法の成立過程を明らかにするのは、容易ではない。なぜなら、いわゆる理論書が存在しないからである。これまでに発行されている書籍『25の作戦』及び『読書へのアニメーション 75の作戦』<sup>(2)</sup>(以下『75の作戦』)は、「作戦」と呼ばれる一連のゲームを中心とした方法を体系的にまとめた作戦集のマニュアルである。「作戦」とは、ある本を読んできた子供たちが、アニメードールと呼ばれる作戦の実行者(主に教師や図書館司書)から、本についての問いを一人ずつ与えられ、その問いに答えることで、本の読み方を学んでいくというものである。マニュアルの根本にある基本的な考え方は、通常、セミナーで講義される。筆者は、これまでに「読書へのアニメーション」を開発してきたエステル(ESTEL、Estudio, Educación, y Lectura、学習教育読書の意)協会という民間団体のセミナーを4回受講した<sup>(3)</sup>。どの場合でも、歴史の説明や根本思想・鍵概念の講義といった理論が半分、受講者が生徒になつての作戦の体験や教材づくりといった実践が半

分である。これらのセミナーのノート(一部は録音)や、セミナー外で質問して得た回答をもとに、その成立過程を再構成していかざるを得ない。すなわち、本稿は「読書へのアニメーション」の成立過程について、筆者の持つ情報を提供するという性質も合わせ持つことになる。しかし、発行されているセミナーの記録<sup>(4)</sup>については、活字となって安定しているので、これらをできるだけ確認・引用することとした。このような情報源をもとに成立過程を再構成することが本稿の主眼となるわけであるが、その中で理論的な基礎が生まれていった事情については、指導方法の特徴を明らかにする鍵となるため、筆者の考察を加えることとした。

#### 2. 基本概念と作戦の構造

まず、「読書へのアニメーション」の基本概念と作戦について説明する。なぜなら、これらは、成立過程を解明する重要な手がかりとなるからである。

- ①アニメーション (animación) ……活気、にぎわい、雑踏(小学館西和中辞典)。すなわち、読書について活発に意見交流を行うことを表したものの。広義には、一連の作戦を取り入れた読書指導法とその試み全体を、狭義には、読書を行ってきた子供たちが集まってきて行われるゲームそのものを指す。
- ②エドゥカシオン (educación、教育) とエンセニャンサ (enseñanza、教授) ……エドゥカシオンは知育、徳育の両面にわたって人格の形成を目指す。エンセニャンサは、英語の teaching に相当し、知識の獲得を目指す(同西和中辞典)。エステルでは、エンセニャンサでは客観性に、エドゥカシオンでは主体に重きが置かれるとし、「読書へのアニメーション」は、学校カリキュラムにそって与えられる知識的なエンセニャンサではなく、子供の内部に根を下ろすエドゥカシオンであるとしている。このことは、以下に述べる内化とも関係する。「読書へのアニメーション」では、読書が子供の主体(内部)へ働きかける(読書を内化する)ことを目指し、本をめぐる外的な活動(例えば本

の要約、文献のリストアップ等)と厳しく区別する。

- ③内(面)化 (interioridad) ……人間が学ぶということは、自分の中に何かを位置づけるのだと考える考え方。そのために「読書へのアニマシオン」では、一人でじっくり考える沈黙 (silencio) の時間が重要であるとする。
- ④アニマドール (animador) ……芸人、エンターテイナー、司会者、進行役 (同西和中辞典)。つまり、「読書へのアニマシオン」の進行役、作戦の実行者。エンセニャンサをする教師と区別するために、この言葉が用いられている。
- ⑤作戦 (estrategia) ……「読書へのアニマシオン」という読書指導法を具体的に行っていく際の方法論。アニマドールが統括する、ゲーム (遊び) である。『75の作戦』は、75個の作戦について、「タイトル」「参加者」「ねらい」「責任者」「必要な素材と手段」「実践方法」「所要時間」「興味・関心と難しさ」「行ったアニマシオンの分析」を説明した作戦集である。
- ⑥スキーマ (eschema) ……図式。「読書へのアニマシオン」では、各作戦を行うことで、子供たちの頭の中に読書に対するスキーマができると考える。この考え方は、内化と結びついている。
- 「読書へのアニマシオン」は、アニマドールが本を選んで子供に与える。子供はその作戦に参加したいと思ったら、本を読んでくる。基本的な作戦の構造は以下のとおりである。
- ①読んできた本の要約を述べ、内容を確認する。
  - ②アニマドールが本の内容についての質問が書かれているカードを配る。カードは一人の子供に一枚ずつ割り当てられる。それぞれのカードには、異なる問いが書かれている。
  - ③子供は自分の力で、黙ってそのカードを読み、その問いに対する答えを考える。
  - ④子供たちは順々に自分の問いを読み上げ、その答えを述べる。分からない場合は保留とし、他の子供たちが各自の問いと答えを言っているのを聞きながら考える。
  - ⑤一通り答え終わったら、保留になっている問いを持つ子供はその答えを言う。それでも答えが分からなければ、他の子供たちが助ける場合もある。
  - ⑥割り当てられたカードにかかわらず、その本について感じたり考えたりしたことを話し合う。

⑦次のアニマシオンを行う場合は、アニマドールが次の本を提示する。

作戦の番号は生まれた順であり、そのうち1から25までは、『25の作戦』『75の作戦』の両方に掲載されている。アイデアから何度もの試行錯誤を経て、方法論として安定してから番号が付される。たとえば、ある作戦をやっている、もっと年齢の高い子供にもというアイデアが生まれると、数多くの実践を経て、新たな作戦として生まれるという具合である。こうして、75もの作戦が生まれた。

### 3. 「読書へのアニマシオン」の成立過程

「読書へのアニマシオン」は、スペインのジャーナリストであるモンセラット・サルト、タレントウム書店という本屋の店主であったカルメン・オリバレスによって始められた。子供が読書をするようになることを目標にして行われた一種の読書運動である。現在は、民間団体であるエステル (サルトは顧問) が活動を引き継いで、セミナーを行っている。筆者が参加したセミナーでは、初めに必ず、この運動の歴史の講義があった。それは、その歴史を語ることで、「読書へのアニマシオン」の根本的な原理の説明に必要と、サルト自身が考えているためである。これらに基づいて筆者が、その講義の記録を再構成し時代区分を設定し成立過程を論じることとする。

#### 3. 1 萌芽期—読書観・子供観の成立—

どんな運動にとっても、その開始時期は重要である。なぜなら、その運動の性質に決定的な考え方が培われるからである。この運動は、1970年代の前半から始まっている。スペインの新聞「YA」の児童欄の責任者で、青少年雑誌「スーパーヘスト」の編集長で、児童雑誌の書評欄などの執筆を担当していたサルトは、1970年代になって、テレビなどのニューメディアが子供の生活を変えていくことに危機感を感じていた。すなわち、「活字離れ」という現象である。運動の直接の契機となったのは、BICE (Bureau International Catholique del' Enfance) 会議である。この会議は2年に1度国際シンポジウムを開く。1974年の中心テーマは読書で、「子供の権利を守り、活字離れを防ごう」であった。教師だけでなく、マスコミ、出版界、図書館や本に関わる者が集まった。コミュニケーションの手段であるメディアの発達及び社会の変化、余暇の増加と子供のリクリエーションの可能性、教育改革の現状等が話し合

われた。その当時欧州各国では、産業改革によって余暇の時間が数多く生み出されていた。余暇が増加すれば子供がそれをどのように過ごすかが問題になり、「読書」がその余暇におけるレクリエーションの可能性を持つものとして注目されたわけである。一方で、コミュニケーションの手段であるメディアの発達、具体的にはテレビなどのメディアが子供の生活に入り込んでいくという社会の変化があった。このことは、子供たちが家庭・地域といった安定した環境の中で成長し自分の価値観や社会観を確立していくその前に、地球規模の様々な情報にさらされることを意味する。サルトは、子供が自分の価値観や社会観を確立していくためには読書が重要であると考えた。そして、この会議が契機となり、「読書へのアニメーション」の「基本的なコンセプトに開眼した」という。

筆者の見解では、1970年代に「読書へのアニメーション」の基本的な考え方が作られたことは、後のこの運動の方向付けに決定的な意味を持っている。つまり、ここでサルトは、自分の「読書観」「子供観」を確固たるものとしたのである。

サルトの「読書観」とは、余暇の時間を充実したものにするという意味での読書と、社会の変化から自分を守っていくという意味での読書である。だからこそ、エンセニャンサである学校の読書ではなく、エドゥカシオンである日常の読書を対象としたのである。サルトはテレビなどの新しいメディアによって、子供たちは自分の認識能力に合わせて世界を少しずつ知っていくことができなくなったとしている。子供たちは新しいメディア以前に、「小さな世界」を築くことができた。ところが、現在では、地球規模の様々な現実に子供たちがさらされてしまい、自分の「小さな世界」を築き、価値基準となる「ものさし」を作ることができなくなったというのである。しかし、本の世界では、子供の認識能力に合わせて様々な問題が描かれている。子供は、自分にあった「ものさし」を徐々につくっていけるというわけである。セミナーで用いられた例を示すならば、両親の離婚<sup>5)</sup>という理解し難い現実があった時、子供は何とかこの事態を理解しようとする。サルトは、優れた児童文学には、子供の「ものさし」に合わせた現実の切り取り方が示されている。子供はこのような優れた児童文学を読むことによって、この事態を乗り越えていくことができるというのであ

る。サルトは、「本の中には全てがある」と述べているが、それは現実を見る見方が示されており、読書をすることによって、子供が現実に対する適切な能力を持つことになるという意味である。

また、このような読書観から明らかになるサルトの子供観は、以下のようなものである。子供の認識は、大人のそれとは違って生活年齢や知的発達にあわせて行われる。子供は大人から保護され、子供時代を通過し、成長しなければならない存在である。そして読書は、このような子供が、様々な問題を自分の発達に合わせて乗り越えていくために必要なものと考えられる。サルトは、子供は自分の自身で自分の読書を形づくっていくことが大切であり、読書はエンセニャンサとして学校で上から与えるべきものではないととらえた。

この読書観は、子供自身が読みを育てていくという子供観とともに、次の確立期を経て、読書や学習に関する心理学理論に支持されることになっていく。

### 3. 2 確立期—「作戦」という方法論の確立と読書や学習に関する心理学理論による支持—

BICE 会議から5年後の1979年に、サルトとその親友のオリバレスは、「読書へのアニメーション」の運動を始めることとなる。オリバレスの呼びかけで、サルトと主婦や教師や司書や記者など子供の読書に関心を持つ14名がマドリッドにあるタレントウム書店の2階に集まって、講習会を行ったり、近くの図書館に出かけて行って子供たちを対象に「作戦」を実行したりするようになった（このグループは、タレントウム・サークル (Círculo Talentum) と呼ばれた)。「作戦」は、繰り返しになるが、読書をめぐって展開されるルールのある集団遊びのことであり、「読書へのアニメーション」の方法論である。「作戦」はアニメードールによって運営される。「作戦」は実践を積み重ねて確立していき、1984年に25の「作戦」集がマニュアルとして出版されることとなる。この14名の活動を、教育学者・心理学者であるフランシスコ・クベルス・サラスが読書の重要性を学者として説き、このグループの活動を理論的に支えていった。サルトは、「サラスさんは、どういう方法を行いなさいということは言わなかったけれども、子供にとって読書がどんなに大事かということを理論的に説明してくれた」と述べている。

筆者は、この運動がこの時期に確立していったの

は、1970年代から1980年代に展開した認知心理学に基づいた読書理論の成果を取り入れていったからであると考えている。そのために、クベルス・サラスの活動は非常に大きな意味を持っていたと考える。その根拠として、読書や子供をめぐる認知心理学の成果を挙げたい。①スキーマ (eschema) 理論、②内化 (interioridad) の理論、③他者の支援による学習の理論、である。

1つ目のスキーマ理論は、1980年代に我が国にも紹介され、頻繁に取り上げられた。読書理論との関連で述べるならば、スキーマ理論では、読書過程を、先行知識のネットワークの中に、新しい知識を統合していく過程であるとする。この理論を応用して、サルトラは「作戦」を組み立てた。彼女らの説明を要約すると以下ようになる。「子供たちは、作戦を通して、あらゆる読書のスキーマの中に、新しいスキーマを結合して行きます。例えば、1つの作戦で登場人物に注意をして読むというスキーマを得たとします。するとその子は、別の本を読むときもそのスキーマを使って、登場人物に注意しながら読むようになります。次に別の作戦で、登場人物の行動を読むということをしたとします。そうすると前に得た登場人物に注意して読むというスキーマに結び付けて、登場人物の行動をとらえるスキーマをつくって行くわけです。」すなわち、サルトラは、本を読むために重要なスキーマとなることは何かを考え、そのようなスキーマを獲得できるような作戦を開発していったのである。スキーマに対する彼女らの理解が妥当かどうかは議論の余地があるが、いずれにせよ、スキーマ理論に触発されて、このような作戦群を生み出すに至ったのである。

2つ目の「内化」は翻訳では「内面化」となっているが、外的な活動が認知的に内的に取り込まれていく過程を重視するという意味において、ピアジェ心理学で言うところの「内化」と同じであると考えられる。サルトラにとって、「作戦」によって生じる外的な言語活動は「内面」に届くものであり、また、「内化」しなければ、作戦は読書にとって意味のない活動になってしまうと考えるのである。そのために、サラスとサルトラは沈黙の時間を重視する。「作戦の中の静けさは、内面化への道を開くという役割を果たします。アニマシオンは、外面的でにぎやかなお祭り騒ぎのことではなく、人間の魂の奥深く届くことを願った言葉だということ忘れては

なりません」<sup>16</sup>。このように、やはり「内化」の理論の支持されて、「作戦」という方法論が確立された。

3つ目は、2つ目と関係するのであるが、ヴィゴツキー派に代表される他者の支援による学習の理論である。ヴィゴツキーは、子供が個人できるレベルと教師や仲間の援助によってできるレベルとの間を、「発達の最近接領域 (ZPD)」と名づけた。そして、子供の精神発達を、他者とのかかわりの中で言語が内化していく過程としてとらえている。サルトラはこの考え方を取り入れ、「作戦」においては、他者との活動を通して、読書過程が個人の中に内化させるような形をとった。さらに、その他者の人数やレベルはどのくらいがいいか、試行錯誤を繰り返し、「作戦」を厳密化していった。

以上のように、これら3つの心理学理論によって、「作戦」という方法論が確立したわけであるが、これらの理論は同時に、サルトラの持っていた子供観および読書観を支持した。スキーマ理論は、読書過程が子供自身によるスキーマの結合によって行われること、学校教育のエンセニャンサによって押し付けられるものではないことを明らかにした。したがって、大人にできることは、成長していく子供の姿をとらえ、その発達段階に応じて優れた本に出会わせること、そして、外的な言語活動が内化していくような「作戦」という手法をとることであった。

### 3. 3 拡張期—セミナーの開催とエドウカシオンの概念—

その後、活動は広がっていく。1986年には、サンタ・マリア財団より資金的援助を受けられるようになり、やがて、彼女らのグループ(ノーバル (Noval) という名前になった)は、マドリッド以外の都市や、スペイン以外の国にも拡大していった。学校がサンタ・マリア財団とコミーリャス大学の協力で設立され、そこでアニマドールを養成するようになった。この学校の卒業生72名が、アニマドールの資格を与えられ、各地で学校の教師に対して「読書へのアニマシオン」の普及活動や指導を行ったのである。また、メキシコを始めラテンアメリカの国々に「読書へのアニマシオン」は紹介されるようになった。1990年には、「スペインとラテンアメリカで合計9100名もの教師の研修を行うことができ」<sup>17</sup>たという。彼女らの活動(この頃には、読書へのアニマシオングループ (Grupo de animación a la lectura) という呼び名になっている)が認められ、1993年には子供の

本の普及に尽くす団体に送られるIBBY朝日児童図書普及賞を受賞した。受賞は朝日新聞の記事になり、この新聞記事を読んだ佐藤美智代が、青柳啓子とともに『25の作戦』を1997年に邦訳・出版することになる。1990年代の中頃、サンタ・マリア財団の援助の形態が変わり、グループ名がエステルとなる。1990年代の終わりには、スペイン教育文化省の援助で、教員向けの100時間セミナーを行うようになる。このように、彼女たちの活動の基本は、セミナーにある。セミナーを行い、「作戦」を実行しながら新しい「作戦」を開発していく。セミナーを通して、理論の整備を行ったのである。実際筆者の体験したセミナーでも、講師達はレジュメを用意し、「読書へのアニメーション」に必要な要素（作戦、本、子供など）の概念整理を行っていた。しかし、それを理論書として出版することはなかった。

最後にもう一度、重要概念である「エドゥカシオン」について論じる。この概念が「読書へのアニメーション」運動の基本的な立場を示しているためである。エンセニャンサは学校教育制度に代表されるように、大人が教えるべき内容をもっており教えていくものを指す。子供がまだ持っていないものを与えていくことと考えればよい。学校における授業は教師の方で意図した教育内容がありそれを教えていくわけであるから、典型的なエンセニャンサであるとサルトは考える。それに対して、エドゥカシオンの方は、子供が持っているものを「引き出して」いく教育であるとする。エドゥカシオンにするために、エステルでは、次のようなこと（条件）を守るようにと述べている。整理すると、①参加したい子供だけ参加する。②参加したい子供たちに、本を読んでもらう以外の課題（感想文など）を与えてはいけない。③本は1冊丸ごと扱い、教科書やプリントなどは用いてはいけない。④授業では行わず、学校で行う場合も授業とは違う状況で行う。⑤作戦は遊びであって評価（生徒から見て点数をつけられること）をしてはいけない。しかし、これらの条件を守ろうとするのはかなり難しいというのが、一般の教師の実感であろう。このエドゥカシオンの概念には2つの背景があると筆者は考えている。1つは、確立期で見たように、この運動が、スキーマ・内化・集団および他者の援助による学習の理論に基づいて構成されていることである。スキーマ理論では、読書行為は先行知識のネットワーク（スキーマ）の

中に、新しい知識を統合していく過程であると考えられる。すなわち、読み手自身の創造的過程であり、読み手自身の問題意識やモチベーションが重要になる。読書は教えられるものではなくて読み手自身の中にあるものと考えた。また、協同による学びを内化していくことを主眼としているので、単に読書の周辺にある外的な活動（例えば、本について劇をしたり、本に関するスライドを見たりすること）は読書のエドゥカシオンではないとする。もう1つの背景は、オリバレスとサルトが、学校教育の外で本を扱う仕事をしていたということによる。彼女らは、子供たちの中にある読書の喜びを引き出していくためには、色々と障害のあるエンセニャンサとは別の場を設けなければならないと考えたのである。

#### 4. 「読書へのアニメーション」のその後の展開

##### 4.1 日本の国語教育における展開とエンセニャンサ化

このような経緯で成立した「読書へのアニメーション」は、どのように日本に広まっていったのだろうか。日本で最初に「読書へのアニメーション」が紹介されたのは、1997年の『25の作戦』邦訳の出版である。サルトラの活動は、セミナーが中心となっており、原書を読むだけではこの運動の全貌や本質を理解しにくい。そこで、この邦訳書では、この理解しにくさを解決するために、以下のような工夫を行った。①冒頭に、生涯教育の観点から「アニメーション」という概念を研究してきた増山均の解説「アニメーションとは何か」を挿入した。②小学校教師の岩辺泰史による実践レポート「ぼくらは、読書探偵団—活字の世界はおもしろい」を付加した。具体的な教材・授業展開・子供の反応が記してあり、活動をイメージしやすいものである。③司書の佐藤涼子の文章「子供たちと本—いま、アニメーターの役割を考える」を挿入した。④司書の黒沢克朗による「読書のアニメーションのための参考図書リスト」を付加した。⑤原書にあった専門用語が多くて難解なサラスの序文の大幅に削除し、教師に分かりやすい日本語に書き換えた。⑥原書にあった、サルトによる「作戦」の使用法の説明を半分の長さに要約した。これらの改変で、「アニメーション」の概念の広がりや多面的な活動を紹介したのである。しかし同時に、サルトラが用いている「エドゥカシオン」の概念が理解しにくくなった。また、②によって授業として、すなわち、「エンセニャンサ」としての読書指導実践

を「読書へのアニメーション」として紹介したということにもなる。

岩辺はこの後、この実践レポートからヒントを得て、「物語探偵団」というグループを組織する。そして『25の作戦』を用いた実践を集めて、『ほくらは物語探偵団—まなび・わくわく・アニメーション—』（岩辺泰史編著、柏書房、1999年）を出版する。この本は読書をめぐる様々な活動を取り上げていて興味深いものであるが、エステルのお考えとは次の5点で異なっている。①授業で行っている、②自由参加ではなくクラス全員の子供を対象に実践している、③1冊の本や教材でたくさんの作戦を用いている、④教科書教材を用いている、⑤探偵という外的活動に焦点をあてている。このようになった原因は、岩辺が「エドゥカシオン」の概念を学ぶ機会がなかったことである。それらはセミナーで講義されるものであり、翻訳書中のサラスの序文は大幅に削除されていた。また、教師の立場で、子供を「自由参加」にするには抵抗があるだろうし、実際にどのような時間枠の中で作戦を行えばいいのか、イメージできなかったのではないかと考える。加えて、全員がそれぞれ十分読んでこられる数を揃えようとすると、教科書教材が便利だと考えがちである。岩辺がこの中で提案しているのは、いわゆる「読解」によって「国語ざらい」をふやすよりも、ゲーム（作戦）で楽しく読書をしようということである。そして、その楽しくするための演出として、「探偵」を用いたのである。彼らは学校での研究会や授業公開などを行ってきた。研究会には300人を越す教師が訪れることもあったということで、彼らの活動は、日本における「読書へのアニメーション」の展開に大きな役割を果たした。

さらに、元教師の上條晴夫は、ゲームにはルールがあり、ルールによって授業を組織することができると考え、「読書へのアニメーション」運動に関心を持った。そこで学習ゲーム研究会という組織を立ち上げ、その中に「読書へのアニメーション」を組み込んだ。上條は、教育雑誌『授業づくりネットワーク』の編集長でもあり、特集（第169号、2000年4月）を組んで、「読書へのアニメーション」が教師に認知されるのに貢献した<sup>(8)</sup>。

さて、このような経緯で、日本に「読書へのアニメーション」が導入されて、様々な実践が行われるようになった。多くの教師は、岩辺の著書、上條編集

の雑誌に基づいて、作戦を行っていくことになった。活字になった実践をみていると、サルトラのお考えとは違う6つの特徴を持っている。①授業で行っている、②自由参加ではなくクラス全員の子供を対象に実践している、③1冊の本や教材でたくさんの作戦を行っている、④教科書教材を用いている、⑤作戦の難易度と子供の実態があっていない、⑥作戦のねらいと作戦の実施状況があっていない。筆者は、これらの実践が国語教育における読書指導として、問題があると述べているわけではない。エンセニャンサとしても読むことの指導は必要である。ただ、本稿では、スペインの「読書へのアニメーション」の展開という問題意識で、これら日本の実践を検討している。⑥について具体例を挙げる。吉田伸子の実践では、「注文の多い料理店」について作戦12「物語バラバラ事件」を次のように行っている。

「作品名を知らせずに、短冊にした13の注文の言葉を配り、物語の展開を予想しながら並べるように指示した。『注文の多い料理店』の読書経験のある学習者は、作業中に作品名に気づいたようであるが、注文の言葉だけの並べ替えは読書経験があっても難しい。ほとんどの学習者は、勘をたよりに、しかしゲーム感覚で楽しみながら作業に取り組んでいた。ここでの読みの力としては、f <予想力>が求められる。」<sup>(9)</sup>

『75の作戦』によると、作戦12では読んできた物語の順序に着目し、そのねらいは、「読むときの集中力を鍛える」「物語の順序やそのテンポの価値を知る」ことである。つまり、作戦のねらいと吉田実践のねらいである予想力との間に、ずれが生じている。しかし、予想力は、「読書へのアニメーション」作戦12では扱わないが、国語教育において指導されるべき読みの力である。つまり、『25の作戦』のような方法のマニュアルを見たときに、我々はこれをエンセニャンサとして理解する可能性を持っている。吉田がこの実践を行った時にはセミナーの情報も伝えられておらず、『75の作戦』の翻訳書も出版されていなかった。しかし、そのような背景を差し引いても、「読書へのアニメーション」は、エドゥカシオンとして成立したものでありながらエンセニャンサ化されるような構造を内在しているのである。そのことを次に、スペインの現状をたどりながら証明する。

#### 4. 2 スペインにおける現状

「読書へのアニマシオン」のエンセニャンサ化は、日本特有のものなのだろうか。ここでは、2001年12月に行った、スペインの書店や学校の視察に基づき、スペインの現状を明らかにする。

マドリッドの中心地グラン・ビアにある書店カサ・デル・リブロは、スペインで有数の書店である。児童用図書の階の中央部に、『75の作戦』の原書が平積みになっていた。出版から3年後にこの状態であるということは、よく購入されているのであろう。また、筆者が店員に「読書へのアニマシオン」について尋ねたところ、このことをよく知っており、この運動の認知度は高いと感じた。しかし、『75の作戦』以外の「読書へのアニマシオン」の書籍については、違う階の「エンセニャンサの棚」にあるということであった。つまり、児童用図書を担当する店員でさえ、「読書へのアニマシオン」はエンセニャンサの一種ととらえているのである。

また、マドリッドの王宮近くの児童用図書専門店ラ・マル・デ・レトラスでは、毎月2回「読書へのアニマシオン」を実施している。店内には、その写真が飾られていた。写真の子供たちは、先のとがった帽子や風変わりな衣装を身に纏っていた。先述のように、エステルが進めている「読書へのアニマシオン」は沈黙によって読書を内化させることを必要とするので、仮装などの外的な活動は行わない。疑問に思っエステルにメンバーに質問したところ、この書店の活動は、読書を内化させるものではなく、劇そのものを楽しむための活動になっているという回答を得た。また、ここでは本棚2段分が「読書へのアニマシオンの棚」となっている。その棚の書籍の多くは「読書へのアニマシオン」の仕方のマニュアルである。しかし、これらは、エンセニャンサとしての書籍で、エステルが進めているものとは異質という。『75の作戦』と同様多くの作戦を収めているが、実は授業で用いる活動集ということであった。

以上より、本場スペインでも、必ずしもすべての人にエステルのエドゥカシオンの考え方が理解されているのではないという結論に達した。むしろ、一般的には、エンセニャンサととらえられている。このことは、サルトラの「読書へのアニマシオン」が、理解しにくいものであることを示している。一方で、「読書へのアニマシオン」のマニュアルである『75の作戦』は、新たなエンセニャンサのヒントを多く

含んでいる。セミナーで理論面を学ぶことを前提にし、この概念を十分に書籍で説明せず、作戦集だけ出版すること自体が、「読書へのアニマシオン」のエンセニャンサ化を促す構造になっているのである。

しかし、スペインにおける全ての実践がエンセニャンサ化しているわけではない。エステルメンバーのアンヘル・シスネロスは、教員として「読書へのアニマシオン」を学校で行ってきた。その学校、コレヒオ・アモロスでは、エンセニャンサにならないようにするために、授業を持つ担任以外の教師がアニマドールを務める。筆者が見学した作戦は全員参加であったが、子供たちは作戦を長く経験しているために、これが授業とは違う面白い遊びであることを知っており、全員が望んで参加しているという。また、この学校では、図書館のほとんどの本は、30冊ずつ用意されている。このような例はスペインでもまれであり、たいていの学校では、日本と同じように、1冊か多くても2冊しか同じ本を購入しない。したがって、多種多様な本を所蔵することができるが、実際の利用率を考えると、コレヒオ・アモロスの方が高いという結果になるであろう。日本で「読書へのアニマシオン」をエステルのかんがえで行うならば、今後はこのような実践形態と本の購入や管理についての配慮が知られることが必要である。

このように、エステル「読書へのアニマシオン」は、エドゥカシオンという鍵概念に成り立っているが、それはかなりの努力に基づいてできることで、少しでも気を緩めたり手を抜いたりするとエンセニャンサになってしまうという弱さを構造的に持っているといえよう。

#### 5. まとめにかえて—「読書へのアニマシオン」が提起している読書指導の根本的な問題—

以上、「読書へのアニマシオン」の成立と展開について論じ、これを支持している心理学理論を検討し、その構造的な弱さを指摘した。最後に、この運動が提起している読書指導の根本的な問題を考察する。

サルトは、「読書へのアニマシオン」は、エンセニャンサではなくエドゥカシオンであるとしたが、エンセニャンサの営みを否定しているわけではない。むしろ、エンセニャンサは読書ができるようになるために、不可欠なものであると考えている。ただ、エンセニャンサだけでは、自分の意志で読書を

楽しむ子供を育てることができない。そのために、エンセニャンサとは別の、エドゥカシオンが必要と考える。読書のエドゥカシオンとは、子供の中にある潜在的な読みの力を引き出していくことである。そのためには、子供自身が「やらされている」という義務感を持たずに、自分の意志で読書することが大切である。また、読書は子供にとって自ら発見するものであるという。読書の本質を考えた時、教えられる経験だけでは、本当には読書は内化しないという根本的な問題を、この運動は提起している。

ここでさらに、日本の読書指導史について論じてみたい。「読書へのアニメーション」運動が始まった1970年代は、日本でも読書指導が盛んに論じられた。この時期に、日本では、「読むことの指導」において、「読解」指導の偏りをなくし、「読書」指導をその両輪と認め、重視しようという動きがあった。エンセニャンサと「読解」、エドゥカシオンと「読書」は、厳密に言えば同じ概念ではないのだが、子供に読む力をつけるためには、エンセニャンサや「読解」だけでは無理であるという認識構造は同じである。つまり、読書を指導するということは、学校で授業という形で指導するだけでは不十分であり、補うべき何らかの方法が必要であるということである。日本の1970年代の読書指導論では、子供個人の生活における読書を、学校教育の中に何とか持ち込んで指導しようとしたのである。しかし、作戦などの方法を持たずに、そのまま学校に入れようとした。ここに矛盾が表出し、あまり根付かない結果に終わったと筆者は考えている。「読書へのアニメーション」では、子供の自由意志や自然な読書のあり方を維持するために、すなわち、エドゥカシオンにするために、詳細な条件を設定していた。1970年代の日本の教師の中に、このような条件設定や、授業以外の場を使った方法を開発するという発想は存在しなかったのである。「読書へのアニメーション」は、他人に教えられているのだけでは本当の意味で内化していかない読書の本質をとらえ、それを指導していくための、具体的な場を設定し、方法論を提示したと評価できる。

最近では読書の重要性が法律の上でも示され、読み聞かせボランティアや朝の斉読書などによって、読書指導を行う様々な場が学校でも確保されつつある。「読書へのアニメーション」をエドゥカシオンとして行う素地が整いつつある。これは、最近3年ほ

どの間に急速に変化したことである。しかし、「読書へのアニメーション」は、厳しい条件の上に成り立ち、常にエンセニャンサへと変化してしまう危険性を持っている。我々がこの方法に関わる時、そのことを念頭に置き、この運動が提示した読書の本質をとらえていくことの重要性を認識したい。

1. モンセラット・サルト、佐藤美智代・青柳啓子訳 (1997) 『読書で遊ぼうアニメーション—本が大好きになる25のゲーム—』 柏書房  
原書：Montserrat Sarto (1984) *La animación a la lectura ; Para hacer al niño lector*. Ediciones SM
2. M・M・サルト、宇野和美訳 (2001) 『読書へのアニメーション 75の作戦』 柏書房  
原書：Montserrat Sarto (1998) *Animación a la lectura, con nuevas estrategias*. Ediciones SM
3. 1999年9月17日 (マドリッド)、2000年5月13日～14日 (東京)、2000年11月6日～17日 (マドリッド)、2001年12月10日～15日 (マドリッド)。
4. 佐藤涼子 (2000) 「アニメーションを求めて—ビブリオテカー一行スペインへゆく—」 (1999年9月17日の記録等)、国立教育研究所 (2000) 『『国際読書教育シンポジウム—『生きる力』をはぐくむための読書教育のあり方—』 (2000年5月13日～14日の報告書) である。
5. この例は、セミナー中の質問に対して、サルト自身が挙げた例である。事実、スペインの児童文学で、離婚問題等の子供にとって深刻な問題が扱われるようになったのは、1970年代からである。
6. 『75の作戦』翻訳書、28頁。しかし、この部分の原文は、『25の作戦』原書に掲載されたクベルス・サラスによる序文である。
7. 国立教育研究所 (2000) 『『国際読書教育シンポジウム—『生きる力』をはぐくむための読書教育のあり方—』 国立教育研究所、19頁。
8. この他、学校図書館関係者にこの方法を紹介した渡部康夫、中学校国語科における「教室用アニメーション」を構想した川田英之の活動もある。
9. 吉田伸子 (2000) 「読書のアニメーション教材化に向けての一考察—読みの力に着目して—」 『国語教育探究』第14号、中渕正堯研究室、51頁。

(山形大学)

2002. 8. 31 発送